夢の過客

iijima kōichi

飯島耕一

夢の過客

iijima kōichi

飯島耕一

福武書店

飯島耕一（いいじま・こういち）一九三〇年、岡山市に生まれる。東大仏文科卒。現在、明治大学教授。七五年、「ゴヤのファースト・ネームは」（青土社）で第五回高見順賞を受賞。詩集として「飯島耕一詩集」（小沢書店）「宮古」（青土社）「バルセロナ」（思潮社）「夜を夢想する小太陽の独言」（思潮社）「ラテン・アメリカの小太陽」（青土社）、創作集として「別れた友」（中央公論社）「冬の幻」（文藝春秋）、評論集として「萩原朔太郎」（角川書店）「永井荷風論」（中央公論社）「アポリネール」（美術出版）「島の幻をめぐって」（思潮社）「女と男のいる映画」（福武書店）などがある。

夢の過客

一九八五年九月一〇日　第一刷印刷
一九八五年九月一七日　第一刷発行
定価一三〇〇円

著者　飯島耕一
発行者　福武哲彦
発行所　株式会社　福武書店
東京都千代田区九段南二-三-二八
〒101 電話(03)二三〇-二一三一
振替口座(東京)六-一〇五〇九七
本文印刷　大日本印刷
平版印刷　栗田印刷
製本所　小泉製本
（落・乱丁本はお取替え致します）

© K. Iijima 1985
ISBN4-8288-2161-9 C0093
NDC913 194 220p

夢の過客　目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

彼女のいた島　7
島を探す　41
海やまの国　73
夢の過客　109
影のような川のような鳥　149
景色消失　185
あとがき　213

写真　瀬尾明男
装丁　菊地信義

夢の過客

彼女のいた島

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

タヒチ人は自分の乗っている「魚」がどこへ泳いで行くかわからないので、「魚」の腱を切った。「魚」は咽喉もたち切られて動かなくなった。「魚」は「島」になった。

もともとこうした「島」の住人が、どこか頼りない顔をしているのは、当然と言えば当然なことであろうか。

昔、こうした島で生れた娘を好きになったことがあった。その娘を棄てた、と言えば聞えはいいが、正確なところを言えば棄てられたのであった。その前に好きになったもう一人の娘がいた。「カトリックの修道院に入るわ」などと大阪の中之島公園の川の畔りを歩きながら呟いていたが、ある日その姉夫婦に東京の大学にいたわたしは招かれた。成城学園前駅から十分ほどのところにある家だった。行ってみると食卓にご馳走が並べられ、高校で隣りの教室にいた顔見知りの青年がいた。なぜかその青年と二人でご馳走を食べ、酒まで飲んだ。青年もわたしも同じ大学に在学中だった。半年ほどして、娘はその青年と婚約したと聞い

た。あのご馳走は面接試験だったのだ。

そのあとわたしはもう一人の青年、大学の同級生と国電飯田橋駅（法政大学寄り）から歩いて五分ほどの神楽坂の飲み屋に、毎夜のように通った。カウンターの中には、二十二、三の娘が二人いて、その一人が種子島の出身で、わたしはすぐに好きになった。ゴンチャンに似ていた。ゴンチャンと言うのは元宝塚のスターである。昼間はどこかの事務員をしていて、夜、三、四時間この店に立っているということだった。無口で、おしゃべりはもっぱらもう一人の東北出身の娘の役だった。だが、ゴンチャンのややさびしそうな横顔を見るのが何とも言えずこころよかった。

その種子島の娘は、もっと若い頃、島で好きになった男を追って、東京へ来ているのだった。むろん自分で告白したのではなく、意地悪な東北出身のおしゃべり娘が、自分一人の店番の時、わたしの耳もとで囁いたのである。

ある夜、わたしは一杯か二杯のショウチュウに酔ったまぎれに、ゴンチャンに「きみが好きだ」と愛の告白をした。ゴンチャンは「あした、午前十一時頃、飯田橋駅の側のミルクホールに来て。そして今夜のところは下宿へ帰って」とかぼそい可愛い声で言った。

翌朝、わたしはまだ午前十時にならないうちに飯田橋の駅（法政大学側）に着いた。いくら何でも早すぎる。二人だけではじめて会えるという希望で胸がふくらんでいた。まだ二十歳の頃だった。御茶の水まで電車に乗って、あちこちと本屋を廻ったりして、十一時十五分

前に、また飯田橋駅まで来た。国電から見える川の近くに、白い大きな布のノレンを吊した、かなり広い古風なミルクホールがその頃あった。

ノレンをかき分けて、内部へ入ると（夏だったか冬だったかどうしても思い出せないが、寒い季節ではなかったようだ）、ゴンチャンが右手の奥の席に一人ぽつんと坐っているのが眼に入った。わたしはどうやって近づいて行ったのか忘れたがその前に坐った。ゴンチャンはミルクの入ったコップを前に置いていた。「同じものでいい？」とゴンチャンはやさしく言って（ともかく彼女はやさしい人間だったのだ）、ミルクを取ってくれた。それから神楽坂のゴンチャンはさびしく頼りなさそうな顔をいっそうさびしく見せて、「わたしにはいろいろ事情があるのよ。あなたは将来性のある、立派な大学の学生さんなのだから、わたしなんかとつき合ってはいけないんだわ」と小さなひっそりとした声で言った。

それでおしまいだった。その日からわたしは神楽坂の店にショウチュウを飲みに、と言うよりその娘の顔を眺めに通うのをふっつりと止めた。

いまから思えばその諦め方の早さは異常なほどである。彼女のひとことで、向うはわずか二、三歳上なのだが、すでに大人なのだとすぐにわかったためかも知れない。こちらはいまでも半分子供なのだから、当時はどれくらい子供だったか空恐しくなるくらいだ。ひょっとしてもう一押しすればよかったのかも知れない。もう一押ししてくれという合図だったのかも知れない。しかしそうしなかった。

ゴンチャンとはその後一度も会っていない。この広い東京のどこかで、いまもゴンチャンは五十いくつになって生きているかも知れないが、その神楽坂の店もとっくに潰れて会社のビルになっているいま、探し求めようにも術がない。それにしてもあの時、どうしてもう一押ししなかったのだろう。あれは交際してもいいと半分は言っていたのではあるまいか。いまの苦境から救ってくれと訴えていたのではないか。わたしのほうにも危険を察知する勘のようなものがすばやく働き、さっと逃げ出したのかも知れないが、それにしても彼女の「いろいろ事情があるのよ」というひとことはひどく大人びて聞えたのだった。

島から男を追って出た女が、また島に戻って暮すことは至難のことだろう。してみればゴンチャンは東京かその近辺のどこかにいまも生きているということも言えた。

わたしはと言えば、その後十何年かして教授というものになった。東京の私立大学だが、それでも教授というものにちがいない。神楽坂の泥道をうろついていたのが、いまは革鞄を持つ教授というものになっていた。

十二時頃、鹿児島空港に着いて、リムジンバスで小一時間かかって港の波止場に立った。「喜界古仁屋航路待合所、種子屋久航路のり場」という横書きの看板が出ている。喜界ヶ島は鬼界ヶ島なのではあるまいか。貨車の引込線の錆びてすり減ったレールをまたいで、二階建の建物を一階の外側にとりつけられた鉄の階段で昇って行く。二階の一番奥に切符売場があり、その手前が待合室になっていた。もやっとした田舎くさい待合室だった。第二屋久島

丸の特等、一等、二等のうち、一等というのを買った。三千何百円かで、種子島の西之表港まで三時間半かかるという。カレーライスやコーヒーやアイスクリームをショーケースに並べた食堂の側の口から外へ出て、建物外側に取りつけられた鉄の階段を下り、岸壁の第二屋久島丸を見上げた時、ゴンチャンのことをふっと思い出した。種子島へ行こうと思ったのは無意識に近い選択で、正月東京にいてもつまらないので、どこかの島に行ってみようと思っただけだった。「そうか、これからゴンチャンの島へ行こうとしているのか」という感じが、第二屋久島丸の船体を見上げてはじめて心にひろがった。とは言え戦後五年目の東京はもう茫洋として雲をつかむようだった。ゴンチャンの顔も遠くはるかに光っている雲のようなものだった。

正月の二日だったか、三日だったか、テレビで、西ドイツのボンの反核運動のニュースを見、

ケルンの聖堂にキノコ雲
エッフェル塔が　かたむいて

といった反核の歌を、西ドイツの青年男女が歌っているのを聞いているうちに、どういうものか種子島に行ってみたいような気がした。西ドイツの反核の歌は「ヨーロッパのあるう

ちにいらっしゃい」という題だった。「種子島のあるうちにいらっしゃい」と思ったのか、別にそうでもないが、ともかくこんな歌を聞いているうちに島に行きたくなった。

ケルンには二年前にも行っていた。二度目だった。前に行った時はライン河は美しく晴れて快適だったが、二年前の時は雨まじりに曇っていてひどかった。ラインはもちろん、ケルンの大聖堂も上半分は霧にすっぽり包まれてちゃんと見ることができなかった。

ＮＨＫの放送衛星のロケット打上げが、近々種子島で行われるということも知っていた。ロケットとミサイルはちがうが、その連想で、種子島を思いついたのかも知れない。「種子島のあるうちにいらっしゃい」という声が何となく浮き浮きと旅心をそそった。「反核」といきり立ってもどうしようもないのだ、とわたしはのんびりかまえていた。

一千トン近くの第二屋久島丸の船体を見上げて、種子島の娘に昔棄てられたのをはじめて思い出していた。思えば昔の話だ。

時々旅に出ないと何だか頭の中が空白になって行きそうな恐怖があった。東京の泥一つない地下道のようなところを、蛍光灯で照明された標識をたよりに歩いていると、頭の中がだんだん空白になって行く恐怖があった。心配事がないわけではない。さし迫った難しい翻訳のことで考えなければいけない厄介で煩瑣な問題もある。しかしそれさえも稀薄に抽象的に薄められて、ただ移動し、どんどん過ぎる時間というものを感じている。憂鬱というのでもない、不安というのでもない、淡い恐怖感、これからどうなるのか、これからどこかへ連れ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com